

薬も精神療法も期待できない現実。

コミュニケーショントレーニングで

多くの悩める患者さんに光を灯す。

大人の発達障害に寄り添うということ。

Syndrome 加藤 進昌

Nobumasa Kato

昭和大學附屬烏山病院長 / 昭和大學大学院保健医療学研究科 教授



生きづらさを抱える彼らの 安心でできる場所を。

急増する大人の 発達障害の受け皿に

近年、発達障害の大人が増えているという。その数は定かではないが100万人を超えともいわれる。その代表的な症例が「アスペルガー症候群」であり、「あの人、どこか変わっている」「会話がかみ合わない」「目を合わせない」「社会性に乏しい」など、職場でも思いあたる経験をした人は少なくないだろう。

しかし、大人の発達障害の場合、小児はもちろん、成人の精神科でも受け入れられないケースが多いという。

「小児自閉症と同様に、大人の発達障害については、基本的に薬は無効です。



いわば、医者にとって最強の武器がないに等しいものです」

そう話すのは昭和大学附属烏山病院長の加藤進昌、大人のアスペルガー症候群の権威である。

アスペルガー症候群の大人たちが病院を訪ねても診断するだけで、「治療法はありません」「個性だからそれでいいんです」と突き放されることも多いという。

アスペルガー症候群の場合、社会性に対する認知そのものが欠如している。生まれつき、心の目が見えていない状態であり、治療薬やカウンセリングなどの一般的な精神療法はほとんど役に立たない。

こうした状況に精神科医である加藤は黙っていられたかった。

「薬が期待できないとなれば、デイケアでのコミュニケーションスキルを訓練するしかない」

2008年、加藤が院長を務める昭和大学附属烏山病院では、成人の発達障害の専門外来を開設した。同時に、アスペルガー症候群患者を対象とし、社会生活や人間関係をスムーズにするための訓練や、患者同志の交流を目的とする「デイケアプログラム」も開始し、増加する発達障害患者を一手に引き受けている。

マスコミにも大きく取り上げられ、開設以来、初診患者の累計は3000人を超える。外来予約は常に2カ月先まで埋まっているという。

Asperger Treatment



都市型の急性期病院へのシフト

そもそも烏山病院といえは、精神科病院として歴史ある病院である。昭和30年代から、わが国では最初ともいえる精神科リハビリテーションを展開してきた。2007年、院長に着任した加藤はその伝統を受け継ぐ立派なりハビリテーションセンターを見て、違和感を抱いた。伝統に呼応するように利用者もかなりの高齢化が進んでいたのである。

「この施設を生かさなければ。病院に新しい伝統を創らなければ」

加藤は改革に着手した。立地・設備とも恵まれた条件を備えた烏山病院を、全国の多くの精神科病院が直面しているような「高齢者施設化」の流れに任せるわけにはいかない。その一方でメンタルケアに対する社会のニーズの高まりをひしひしと感じていた。→

そこで加藤は精神科救急を含めた急性期対応の病院へのリニューアルを進める。さらに烏山病院の独自性、専門性を備える必要があると考えた。

「それは臨床面でも重要ですが、大学附属病院として意義のある研究対象となり得るもの。さらに社会がいま最も求めているテーマを考えました。それが、私自身、長年携わってきた発達障害、特に大人の発達障害だったので」

「発達精神医学」の発信地として

アスペルガー症候群は自閉症の延長上にある病気である。自閉症と同様に脳の病気で、「社会性」「コミュニケーション」「想像力」の点で問題が起こる。しかし、自閉症のような言葉の発達には遅れがなく、標準以上のIQを持つ人

デイケアの就労に向けたパソコン講座の様子。春から就職したデイケア出身者が講師をつとめ、人気がある。



行き場のない彼らに、いま提供できることを。

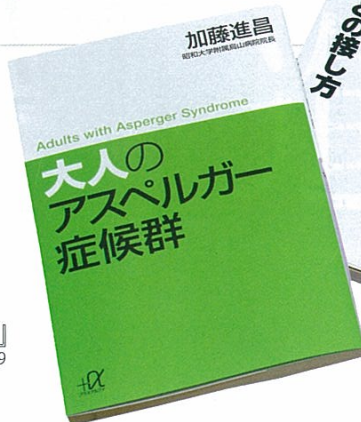
Asperger Syndrome Treatment

加藤進昌 著書

『あの人はなぜ相手の気持ちがわからないのか』
PHP文庫/2011

『ササッとわかる「大人のアスペルガー症候群」との接し方』
講談社/2009

『大人のアスペルガー症候群』
講談社+α文庫/2012



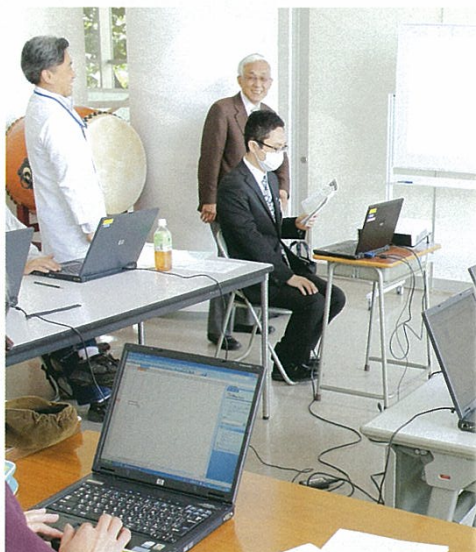


も少なくない。その結果、知的レベルが高い人では義務教育期には顕在化せず、自立した対人関係と社会参加が求められる成人後に問題として表面化することが多い。比較的男性に多く、理数系に強い高学歴の人が珍しくない。

また、子どもがアスペルガー症候群と診断されたことをきっかけに自分にある同じ障害に気づいて相談にくる親も相次ぐようになった。テレビや新聞、雑誌にも数多く取り上げられ、マンガの主人公にもアスペルガー症候群が登場する。

「新しい概念、新しいカテゴリーが生まれたということでしょう。今まで何だかわからなかった症状や、行き場のなかった人たちが、発達障害という疾患概念に照らして考えてみることで、納得がいくようになった」

社会的認知が進む中で、烏山病院が展開するアスペルガー症候群患者へのデイケアは、当事者たちのコミュニケーションシントレーニングや交流の場として安心できる場所を提供している。この春、デイケア出身者3名が、ここ烏山病院の事務職員として就職を果たした。「我々スタッフは、ハラハラしながら見守っていますけどね(笑)」



全国から集まる発達障害の症例をもとに研究にも力を入れ始めている。文部科学省が推進するCREST(戦略的創造研究推進事業)にも認められ、現在、MRIを使用した脳画像の共同研究が行われている。「とかく精神科はわかりにくい学問だと言われがちです。それは精神を科学することの難しさからでしょう。しかし、いまニューロサイエンスの分野では高度な研究が盛んに進められています。ただ、それだけではない。いま提供できることをやることも大切です。発達障害の場合、それがデイケアなのです」

烏山病院では、今年度中に「発達障害医療研究センター」の設立を予定している。新しい「発達精神医学」の発信地として、まだまだ加藤の役割は終わらないようだ。



『プロチチ』 逢坂みえこ 講談社

アスペルガー症候群の夫がキャリアウーマンの妻にかわり、生まれたばかりの息子の専業育児に奮闘するコミック。作者は烏山病院にも何度か足を運び、加藤からアドバイスを受けた。



デイケアホール

●Profile

加藤 進昌 (かとうのぶまさ)

- 1972年 東京大学医学部 卒業
- 1983年 国立精神・神経センター神経研究所 研究室長
- 1996年 滋賀医科大学教授
- 1998年 東京大学大学院医学系研究科教授
- 2001年4月～03年3月 東京大学医学部附属病院 病院長
- 2007年 昭和大学医学部精神医学教室教授・昭和大学附属烏山病院 病院長
- 2012年 昭和大学大学院保健医療学研究科教授

昭和大学附属烏山病院

東京都世田谷区北烏山6-11-11
TEL.03-3300-5231

発達障害
外来

毎月月初めに翌月の初診のご予約を受け付けています。各月の予約受付日、予約電話番号はホームページなどをご覧ください。

<http://www.showa-u.ac.jp/SUHK/>

※全国から当院にお問い合わせをいただいております。全てのご予約希望に添えない状況になっておりますが、ご理解のほどお願いいたします。